
五番目の人魚姫

のの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五番目の人魚姫

【Nコード】

N19520

【作者名】

のの人

【あらすじ】

王子に恋したけれど、それが叶わなかった姫。
その姫より一つ年上の姉姫のお話。

プロローグ

ナイフを渡した後すぐに水底へと戻ってきてしまったけれど、それは妹が戻ってこないなんてちらりとも思わなかったから。

既に日は昇っている。

妹はまだ来ないのだろうか、そう思って見上げると黒い影が見えた。

帰ってきた！

そう思って急いでそちらへ泳いでいくがどうも動きがおかしい。

あれじゃ泳いでるんじゃないかって沈んでいくみたい。

そして気付いた。

その影の正体は妹ではなく一本のナイフだということに。

妹は王子をナイフで刺すことが出来なかったんだと。

もうここに戻ってくることはないのだと。

私は6人姉妹の5番目で、4人の姉と1人の可愛い妹がいた。

でも、妹はもうどこにもいない。あの小さく愛らしい姿はどこにもない。

残されたものは黒ずんだ一本のナイフ。

一つ下の私の妹。唯一の妹。

海の上へ浮かんだときの話をねだられたときには妹の羨望の眼差しを得ようと大仰に話すことがあった。そしてそんな風にお姉さん

ぶる私へ姉たちはからかいの声をかけて来て、それに拗ねた私に妹が必死で姉さまの話は素敵だった、面白かったと言いついてくれる。そんな妹の姿ひとつで私の機嫌も治り、姉妹みんなで笑いあう。何でも無い、でも確かに幸せなひと時。

でももうそんな時間は決して訪れることはない。

私には4人の姉がいる。妹はもう、いない。

魔女1

あの人間のどこにそんなに惹かれたのだろう。

ふとそんなことを思った。

本当のことを言うときまだ妹を亡くしたという実感がない。どこかふわふわとした気持ちでいる。

この妹に渡したはずのナイフが手元にあるということは、妹が王子を刺せなかったことを示しているのは分かる。

でも、それだけだ。

ただ手元にナイフがあるというだけで、泡になる瞬間をこの目で見たわけではないのだ。

最初の内はいつものように陸の世界を見に行っているのだと思った。

姿が見えないときは海の上へ行けば、陸を見つめている姿を見つけることが出来たから。

やがて日が暮れる頃になってまで誰一人として姿を見かけていないというのに最初に気付いたのは誰だったか。

父の通達が下り捜索隊が組まれたが、ただ時間だけが過ぎていく。私たち姉妹もじつとなんかしていられなかった。妹がいそうなどころは余さず何度も見て回った。かなり陸に近いところだって行った。

それでも見つからなかったのだ。

「魔女に聞きましょう」

何番目の姉か覚えてないけれど、落ち着いた声色だったから多分、

一番目の姉だったんだと思う。

みんなすぐに賛同した。魔女の噂はみんな知っていたけれど、妹が見つかるのならその内容は少しも気にならなかった。

あのまま無作為に探し回っても焦燥感が募るだけだっただろう。藁にも縋る気持ちであの薄気味悪いポリプの森を抜けたのだ。

はたして魔女は知っていた。

声と引き換えに人間と同じ身体一つで陸へあがっていったと、ニタニタと隙間の目立つ黄色い歯を覗かせてそう告げられた。

妹がどんなに陸を好きでそこに暮らす人間を好いていたとしても、それはただ見ていて飽きないぐらいの気持ちであって、この心地よい海の暮らしを捨てるだなんて私たちは誰一人として思いもしなかったのだ。

分かりました。教えてくださったことを感謝します。一番目の姉がそう言ったことでようやく我に返る。

それは他の姉たちも同じだったようで皆で顔を見合わせる。そしてまだ動揺を隠し切れないままに、促されるようにして帰ってきたのだ。

その後は姉さまたちがあちこちに話をつけたようで、慌しい気配はいつの間にか収まっていた。

私は何もしなかった。何をすればいいのか分からなかったのだ。

それから何日か経ったころ、皆で妹の様子を見に行った。

妹は幸福そうに微笑んでいた。

それから毎日妹の様子を見に行くことにした。

妹の方も海辺の方へ来てくれて、私たちに姿を見せるようにして

くれた。

幸福そうに微笑む姿を見て私たちは少しだけ安堵する。

そして海の底へ戻るけれど、すぐにまた陸で暮らす妹が心配になり日が沈むのと同時に会いに行く。

その繰り返しに終止符を打たれたのも間もなくだった。

ある晩、妹は姿を見せなかった。

不安に押し潰されそうな気持ちで迎えた翌日、妹は姿を見せて微笑んでくれたけれど、見ている私たちが悲しくなるような微笑みだった。

それで分かってしまった。

陸を選んだ妹が悲しかった。

陸に住む人間が恨めしかった。

陸へあがることの出来ない自分がかしかった。

そしてまた私たちは魔女の元へと行った。

妹を助ける交換条件として髪の毛を渡したけれど、それで妹が帰ってきてくれるなら何でもなかった。

そして今、ここに妹はいない。

髪の毛を短くした私たちは好奇の視線に晒されることになった。

お母様には不作法だと言われ、おばあ様にも何てことを、と嘆かれた。

そして絶えず誰かに見られている気配に耐えられず、そっと城を抜け出したのだ。

妹のことを考えながらも視線を避けるようにしてたどり着いたのは魔女の家の近くだった。

確かにここには誰かが来ることはない。妹のことがなければ私もここに来ることはなかっただろう。

そして私はそのまま誘われるようにして森の奥へと進んでいった。

魔女2

「お前さんも哀れだねえ」

魔女は開口一番そう言って私を出迎えてくれた。声の調子にどこか蔑んだものを感じる。

「ああ、もちろんわたしにはおまえさんの望みが分かってる。かわいかわい妹の心を捕らえて離さなかった王子のことが気になって仕方ないのだろう」

そう言われて自分が何に気がかかっていたのかに気付く。

でも、この言い方だとまるで私がその王子を好いているかのように聞こえる。

「そういった言い方はしないで。ただ、妹が何を考えていたのか、そして妹を選ばなかったのはどんな人間なのかを知りたいだけよ」

その私の言葉を聞いているのかいないのか魔女はヒェッヒェと不気味な笑い声を立て、その拍子に首に巻き付いている海へびがゆらゆらと揺れた。

「なんだったっていいさ。お前さんもあの歩ける2本の棒切れを欲しがっていることには変わりないのだから」

「別に欲しがっているわけじゃない。確かめるために、陸にあらためるためにそれが必要なのだったら欲しいわ。でも私は人間になりたい訳じゃない。だから、人間の愛や魂もいらない」

自分が愛した人間に誰よりも愛されれば人間の魂を得ることがで

きる、らしい。

でも私はこの海の世界もこの尻尾も捨てる気はないのだ。無くすのは髪の毛だけでいい。

「いいのかい？ まあ好きにすればいいさ。それじゃ、お前さんからは何をもらおうかね」

そう言いながら舐め回すように魔女は私を見る。確か妹は声を魔女に差し出したはず。そして誰かに何かを伝えることが出来なかった。だから声を渡すことは出来ない。

魔女にそう伝えると分かっているとでも言いたげに手を動かす。そうして吟味し終わったのか私の目をひたと捕らえる。

「決めた。お前さんからは片目をもらおう。目玉は二つもあるんだ、一つくらいももらったってどうってことはないだろう。ただ片目だけだから効果はそうさね、大体五日ってところだね。お前さんは王子がどんな人間か確かめに行きたいだけだろう。なら五日もあれば事足りるはずだよ」

「それでいいわ」

そう返した私を見てまた魔女が笑う。

「それじゃ、お前さんの持つてるそのナイフを寄越すんだ」

どきりとする。確かに妹が使うことのなかったナイフを持ってるにいるけれど、それは腰に括り付けてあり、その上から更紗を巻いてあるから見えないはずなのに。

そんな私の逡巡を見透かすかのように魔女は重ねて告げてきた。

「言っただろう。分かってる、と。それはわたしの渡したものだし、

お前さんの髪の毛だって持っている」

さっきとは様子が打って変わったように魔女の口調は苛立たしげになった。

そんな魔女の様子に怯えたのか海へびがさっと魔女から離れていく。

これはさっさと渡した方がよさそうだ、そう判断し腰からナイフを引き抜いて魔女へと渡す。

「それじゃお前さんの目玉を頂こうか。右目か左目の選択ぐらいはさせてあげるよ。どちらを残して欲しい？」

「どちらでもいいわ」

そう言った私をやはり魔女は蔑んだように見て冷笑する。

「そうさね、片目には違いない」

そして目の前にナイフの先端が迫ってくるのが見えた。

魔女3

とられたのは左目だった。

「これでよし、と」

そう言って魔女は後ろの棚にある色のくすんだガラス瓶を取り、さっきまで私の目玉だったものを入れる。

確かめるようにくりりと瓶の中で転がした焦茶色の目玉と一瞬だけ目が合う。

そこで視界が変わっていないことに気付いた。片目になったのだから視野は狭まるはずなのに、ナイフを目に入れられる前と同じ世界がそこには広がっている。

不思議に思い再び魔女へ顔を向けるとそれを見計らったかのようにさっきまで左目のあった場所に何かを無理やり押し込められる。

「痛い！」

思わず目を強く瞑り痛さに呻く私を気に留めた風もなくこれはオマケだよ、と告げる。

「欲しかったのはお前さんの目玉だから視力はそのままにしといてあげたよ。ついでにお前さんの目玉の代わりのものも突っ込んであげた。まあ、そんなものはあってもなくてもお前さんの姿が醜いものになったことには違いはないけどね！」

そう言って魔女はケタケタを笑う。痛みが酷く何かを言うこともままならない。

「さて、後はお前さんに菓を渡すだけだね。すぐに作るからそこで待ってるんだよ」

多少痛みに慣れたところで今度は異物感を強く感じる。さっきまでは痛みばかりに気がいつていたが異物感に気付くと今度はそっちが強く主張し落ち着かない。

それでも思い切ってうつすらと目を開けるとお釜にばいばい何かを入れている魔女の姿がぼんやりと見えた。

「今、私の目はどうなっているの？」

思い切ってそう尋ねるとヒヒ、と笑いその辺りに鏡があるからそれでも覗いてみればいい、と告げられた。

仕方なしにその辺のものを除けていく。何かの図が描かれているだろ、う円盤やら不思議な模様が浮かんでいる海草を掻き分けると、色とりどりの石が嵌め込まれた装飾の鏡が埋まっているのに気付き引っこ抜く。

乱暴にぐいと手のひらで擦ると鏡の向こう側にいる人魚と目が合う。

そこには妹と同じ瑠璃色の瞳の人魚がいた。一瞬息を吞む。が、よく見ると瑠璃色よりも濃く、紺瑠璃色だ。

そこでようやく鏡の向こうにいるのが自分であると認識でき、ゆるゆると息を吐く。

右目は焦げ茶、左目は紺瑠璃、海松色の髪は途中でぷつりと切れている。

確かにこの姿はみつともない。母や祖母にまた何か言われるだろうけれど、それよりも姉たちにこの姿を見られたとしたら。それを考えると心が痛んだ。

魔女4

「できあがりだ」

鏡を覗き込んだまま呆然と物思いに耽っているとそう声がかかった。

「お前さんの妹も飲んだその薬を飲むといい。日の昇る前に岸へ上がり、その薬を飲めばお前さんのその魚の尻尾は二本の足へと変わる。効果はさっきも言ったとおり五日間だけだ。五日目の夜、月が中天を過ぎる頃になればまたお前さんの足はその鱗でおおわれた魚の尻尾に元通りだよ。それから足が出来た後しばらくの間はうんと痛むよ。それこそこのナイフで刺されたかのように」

そう言って魔女は先ほど渡した黒いナイフをこちらに向けて突き刺すようなふりをする。妹もこの薬を飲み同じ痛みを味わったのだろうか。

「ああ、もちろんお前さんの妹だって同じだ。お前さんへ渡した薬とお前さんの妹へ渡した薬との違いは期間だけで後は何一つ違いやしないよ」

尋ねてみるとそう簡潔な答えが返ってきた。

「さあ用が済んだのならそろそろその薬を持ってお行き。いつまでもここにいられちゃ邪魔だ」

気付けば辺りは既に暗い。日が昇るまでにはまだ時間はあるだろうけど、こないきなり陸へあがることになるとは思ってなかった。

出来れば色々準備をしておきたい。

そして去る前に一言お礼を言おうとしたところで魔女がさっきまで手で弄んでいたナイフが目に入る。

「そのナイフ、もらってもいいかしら」

気付けばそう口に出していた。唯一妹と繋ぐものだと思っていたからかもしれない。またもこっちを見定めるようにじっと見つめる魔女と目を合わせる。すると割とすぐに視線を外し好きにな、と短い一言をもらう。

「それじゃ、もらっていくわ」

そう言っって魔女の家から出て行く。

帰り道、ポリプがさわさわと避けるように動いているのを見つめ、ゆっくりと泳いでいく。

やがて城が近付いた頃、またあの煩わしい視線がいくつかこちらに向いていることに気付く。それらを振り切るように自分の部屋へ行く。

じきに部屋にたどりつきあの視線を感じられないことにほっとする。準備が出来て出て行くにしても、このままじゃ視線が煩そうだ。出て行けるのは皆が寝静まってから。

けれど、準備といっても何が必要なのだろう。やはり即物的なものではあるが金子だろうか。トレイに置いてあった海草の包みを開き貝殻を取り出す。が、すぐに人間の金子はこれじゃないことに気付く。確か、金色の硬貨。庭を飾るのに使ったからそこにあるはず。取りに行こうとしてすぐに思いとどまる。またあの視線に晒されるのはごめんだ。出て行くときに持っていけばいいだろう。

他に何か必要なものはあるだろうか。少しだけ考えて妹の部屋を見に行くことに決めた。陸に興味を持っていた妹なら何か役に立つものも集めていたかもしれない。部屋もすぐ近くだし誰かに見られることもないだろう。

そう考えて私は妹の部屋へと向かったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952o/>

五番目の人魚姫

2010年11月14日02時32分発行